

健育会グループは2病院で、コロナ専用病床を開設しました

医療法人社団 健育会 理事長 竹川 節男



西村大臣が石川島記念病院を視察されました

西伊豆健育会病院において9月21日、新型コロナウイルス感染症中等症患者を受け入れる病床を2床新設しました。また27日には、石川島記念病院を18床の中等症患者専門のコロナ病院としてスタート。その背景にある私の思いをお話します。

8月に、田村憲久厚生労働大臣と小池百合子都知事が、正当な理由なくしてコロナ病床を確保しない病院について勧告、従わない場合には公表するとの声明を出しました。しかし、今回の決断はその言葉に動かされたわけではありません。

現在すでにコロナは第5波、じきに6波も来ると言われていますが、私は年末年始に訪れた第3波時から、対応の必要性を感じていました。健育会においても、世の中の状況を見ながら、コロナ専用病床を確保するべきではないか--2000床を超える病院グループが持つ社会性を考えると、当然の責任と考えたからです。

3月から使命感を持ちながらも、課題は多数ありました。特に石川島記念病院は回復期リハビリテーション病院。感染症対応とはほど遠く、業務も全く異なる病院でした。当直職員もすべて外部からの派遣で運営していましたので、まずは課題解決から取り組みました。

そんな中でも新型コロナウイルス感染症の猛威は衰えず、8月には第5波が到来。入院できず自宅療養を余儀なくされている方があふれていると、連日報道されていました。訪問診療医が身を挺して対応している姿を目の当たりにして、改めて、我々も新型コロナウイルス感染症との闘いに参戦すべきと考えたのです。



一方、「西伊豆健育会病院」は二次救急指定病院、常に救急を断らないことが病院の使命です。コロナ患者だからといって、救急を受け入れない理由はありません。今までと同じことをするだけです。とはいえ感染力が非常に強いCOVID-19。国の規定に従い、職員と患者さんの安全を考慮して、専用病床新設に至りました。



西伊豆健育会病院のコロナ専用病床



西伊豆健育会病院での受入初日の朝礼

「石川島記念病院」をコロナ患者専門病院に変えることを職員に話したのは、つい1ヶ月前です。何人賛同してくれるか…そんな私の心配は杞憂でした。職員は顔を上げ、前のめりで耳を傾けてくれました。その姿に“目の前の命を救う”という医療人としての使命感――リハビリでもコロナでも変わらない――健育会職員の使命感の高さを再確認しました。

課題であった当直医に関しても、好意的な申し出によって解決。東京慈恵会医科大学・外科の大木隆生統括教授が外科チームとして応援してくれ、当初から当直を担当くださっていた聖路加病院のチームも残ってくれることになったのです。また、不安もある中、送り出してくれた職員の家族の方の理解にも感謝しています。

このように健育会グループの職員はもちろん、外部スタッフ、ご家族、すべてが「ONE TEAM」になった結果、我々は新型コロナウイルス感染症との闘いに参戦することができたのです。

現在、西伊豆健育会病院、石川島記念病院ともに中等症患者さんを対象にしていますが、人工呼吸器やネーザルハイフローを導入し、重症化した方の対応にも備えています。



石川島記念病院のコロナ専用病床

9月24日には、西村康稔経済再生担当大臣が石川島記念病院を視察されました。院内を巡察された後、20分ほどの意見交換を行いました。私のほか、重田洋平院長や東京慈恵会医科大学・大木教授、丸山看護部長、櫛田主任が参加。新型コロナウイルス感染症対策において医療機関が抱える課題などを中心に、国に求める要望などを大臣にお伝えしました。



その後、西村大臣がマスコミに対して会見を実施。現在の感染状況や対策状況などの説明に加えて、当院の取り組みに寄せる期待や感謝の言葉をいただきました。当日は10名近くのマスコミ取材が入り、「コロナ病床の確保」や「緊急事態宣言解除のタイミング」について、具体的な質問が出ました。世の中の期待の高さが表れていたと思います。

石川島記念病院がいよいよコロナ専用病棟として新たなスタートを切る9月27日。私も病院で直接、職員の方々に話をお話をしました。リハビリからコロナ専門となり、職員の働き方は大きく変わります。しかし、医師、ナースの方々はこれまでも患者さんの治療・ケアに従事してきました。



石川島記念病院での受入初日の朝礼

感染対策に留意しながら落ち着いて対応すれば、十分にミッションを全うしてくれると信じています。